

Life Design Focus

台湾で「孝」について考えた

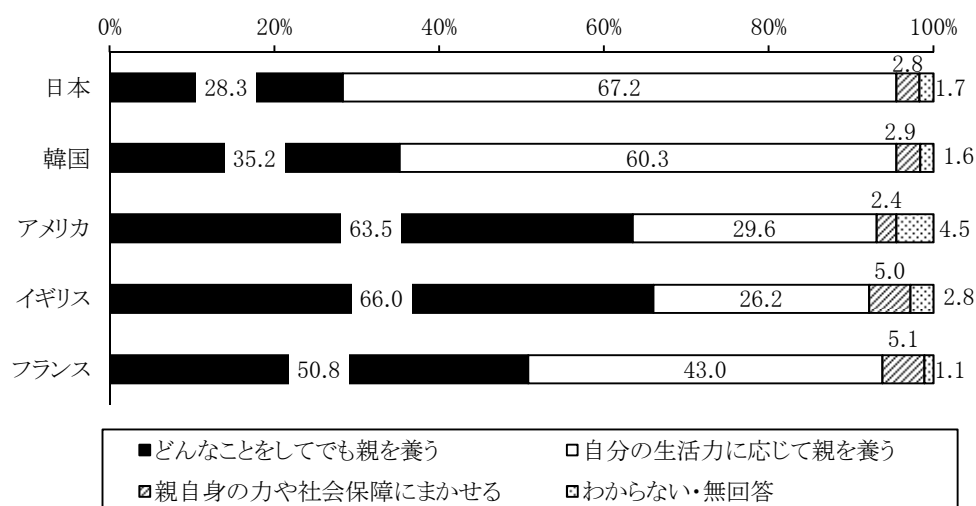
第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部 研究開発室 小谷 みどり

< 儒教国の青年の「孝」意識は希薄？ >

孔子を始祖とする儒教の教えでは、人間性を構築する上で「徳」はとても重要だとされている。その徳のひとつに「孝」が挙げられるが、孝を行う、すなわち「孝行」とは、『大辞泉』によれば、「子として親を大切にすること。また、そのさま」とある。儒教思想は中国のみならず、韓国や日本にも影響を与えている。

ところが、昨今の儒教国の若者は、欧米と比較すると、必ずしも「孝」の考えを強く意識しているわけではないようだ。内閣府がおこなった「第8回世界青年意識調査」によれば、年老いた親を養うことについて、「どんなことをしてでも親を養う」と回答した青年（18～24歳）は、日本では28.3%、韓国では35.2%しかいないのに、アメリカ、イギリス、フランスでは過半数を占めた（図表1）。

図表1 年老いた親を養うか



注：調査は日本、韓国、アメリカは2007年11月、イギリス、フランスは2008年9月時点で18～24歳までの男女
資料：内閣府「第8回世界青年意識調査」2009年

<先祖祭祀の「孝」>

しかし、儒教における「孝」の思想は、子が親に尽くすことだけを指すのではなく、子孫が先祖を敬うことでもある。つまり、子孫が祖先祭祀をおこない、子孫が未来永劫に繁栄することも、「孝」であるとされてきた。

筆者が2009年に実施した調査では、自分のお墓が将来、「無縁墓にはならない」と回答した人は13.9%しかおらず、お墓の継承は多くの人が共有する問題であったが、一方で、「お墓を守るのは子孫のつとめだと思う」という意見に対して、「そう思う」「まあそう思う」と回答した人は77.9%もいた（小谷，2007，「お墓のゆくえ」『Life Design Report（2010年7月号）』：4-15）。

この結果は、戦後、家父長制度が廃止され、核家族化が進み、家や家族のかたちは変容、多様化してきたものの、先祖祭祀に対する私たちの意識が衰退しているわけではないことを示唆している。宗教社会学者の孝本貢も、『現代日本における先祖祭祀』（御茶の水書房）のなかで、「家・同族が弛緩・解体していくことと、先祖祭祀が衰頹・廃絶していくことが必ずしも直接的に結びつかないのではないか」（p. 5）という問題意識を提示している。

とはいえ、少子化が進み、家族のかたちが大きく変容すれば、社会全体からみれば、先祖祭祀が衰退していくのではないかという見方はできる。実際、都内では、お葬式をせず、火葬だけですませる「直葬」が2、3割を占め、「〇〇家の墓」ではなく、血縁を超えてみんなで合葬されるお墓への関心も高まっている。図表1でみたように、日本の青年は、親に対する孝の意識が欧米に比べてむしろ低いことにもかんがみれば、先祖祭祀も衰退するような気もしてしまう。

<少子化でもお墓はなくなる？>

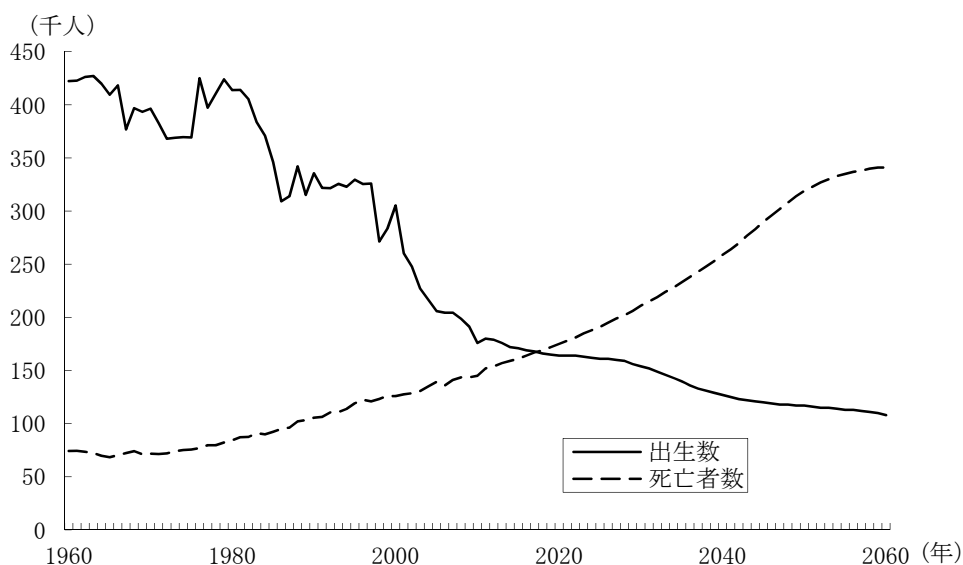
先日、「台日葬儀文化国際シンポジウム」に出席するために訪れた台湾で、数か所の葬祭施設を見学し、こうした先祖祭祀の「孝」について再考する機会に恵まれた。

日本同様、台湾でも出生数が減少しており、2009年の合計特殊出生率は1.03で、日本の1.37を大きく下回っている。一方、2011年の死亡者数は15万2,030人だったが、1981年の8万6,204人と比較すると、この20年間でほぼ倍増しているうえ、行政院経済建設委員会の推計によれば、この先も死亡者数は増加し、2047年には30万人を突破すると見込まれている（図表2）。

その結果、台湾では高齢化が急速に進展している。2005年の高齢化率は日本では20.1%、台湾では9.7%だったが、国連の推計（UN, *World population prospects*）によれば2050年には、台湾の高齢化率が35.69で、世界一の高齢化国になるとみられている（2050年の日本の高齢化率は35.56）。

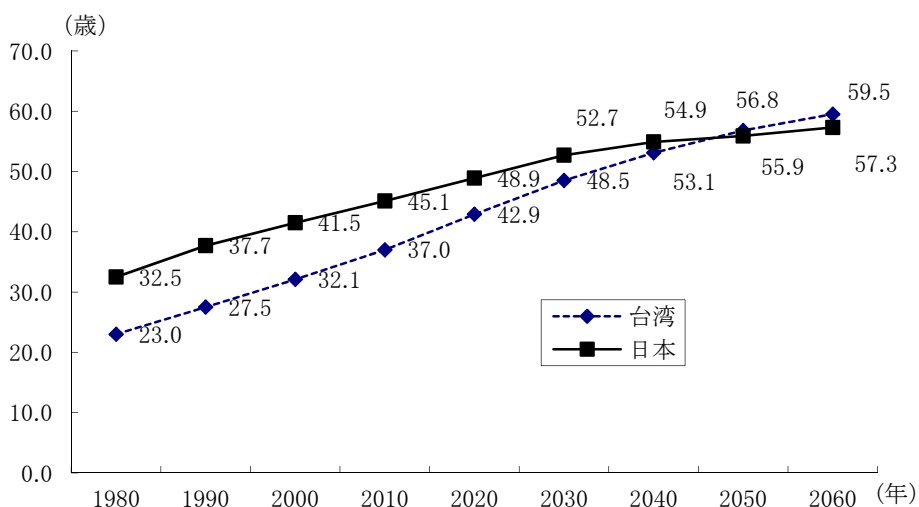
人口の中央値に位置する年齢をみても、台湾では日本に比べて急速に上昇しており、2050年には日本を上回る水準に達する。

図表2 死亡者数と出生数の推移



資料：中華民国行政院經濟建設委員会

図表3 人口中央値の年齢



資料：中華民国行政院經濟建設委員会、国立社会保障・人口問題研究所「日本の人口」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」

そんな台湾で、孤独死や直葬、お参りする人がいなくなった無縁墓の増加に対して、どのように業者や行政が対応していくつもりなのかが、とても気になった。しかし、誰に聞いても、「そんなことを考えたことない」と異口同音に答えが返ってくる。土葬が主流だった台湾では、土地不足や環境問題の観点から、火葬が推進され、納骨堂建設が相次いでいる。その意味では、葬送が変容しているのだが、人口構造の変化が葬送に与える影響はほとんどないと、業者も学者も行政も言い切るのだ。

日本と同じように台湾でも少子化、核家族化、高齢化が進んでいるのに、なぜ、葬送のあり方においても日本と同じ変容をすると想定していないのか、はじめは、筆者には理解ができなかった。しかし台湾における「孝」は、死者や先祖をいかに手厚く葬るかという意味があると説明を受け、すっと納得できた。つまり、子どもがいない人が亡くなっても、親族集団が死者祭祀を担うという、孝を通じてのセーフティネットが強固に存続しているのが、少子化や人口の減少が直接的に、直葬や無縁墓の増加にはつながらないのだ。

台湾では、死者への孝にはお金もかける。通常、死亡してから葬儀をおこなうまでは2週間程度もかかる（台北市の統計によれば、2011年には、亡くなってから火葬までに平均で15日かかっている）のだが、その間、家族は死者へのご飯を供える（拝飯）。自宅で亡くなる人が多かった時代には、こうした作業は遺族の役目だったが、昨今では、葬儀社のスタッフが代行することもある。

ある民間業者の施設を訪問したとき、ちょうど死者への夕飯が配られる時間だった。私たちが食べてもいいような、美味しそうな料理だったが、遺影の前から下げた料理は、遺族やスタッフが食べるのではなく、すべて養豚場へ持っていき、豚のえさになるのだという。こうした食事が朝晩と1日2回供えられる。

写真1 公営火葬場の拝飯所

公営施設では、遺族が好きな食べ物を持参して供える



写真2 民間施設の死者の夕食

葬儀社のスタッフが遺族に代わって朝食、夕食を遺影の前に運んでくれる



もっと驚くのは、写真3、4に代表される模型だ。台湾や中国では、火葬をするときに、あの世に持っていけるよう、遺族がこうした「贈り物」を燃やす習慣がある。筆者が訪問した葬儀社のショールームには、17万円（50万円）近い模型の「家」が置かれていた。あの世への「贈り物」を売るお店には、紙幣に似せた札束が入った箱、高級外車、コンピューター、高級ブランドに似せた紙のバッグなどが並んでいる。子どもがままごとに使うような代物だし、燃やしてしまうだけなのに、遺族は死者への

「贈り物」選びには余念がない。業者も、時代や遺族のニーズに合った最先端の商品を開発するのに一生懸命だ。

写真3 あの世への「贈り物」



写真4 あの世への「贈り物」の売店



家族のかたちや人口構造が変容しても、孝の精神がすたれない限り、死者が無縁化することはないという社会は、生きている者の死の不安をも軽減する。孝とは結局、相手のためというよりは、ひるがえって自分のためでもあるのではないかと思った。

(こたに みどり 主席研究員)